想起と待望の中を主と共に歩む私たち

――礼拝学的聖書研究ノート――

後藤 喜良

一　序論

人間の本分は、真の神である主を礼拝することであり、人間の幸いとは、真の神である主を礼拝できることである。神である主は、私たちが礼拝すべき主ご自身を啓示してくださり、私たちは、ご自身を啓示された神である主を礼拝する。聖書は、主が、みことばと御業によって、私たちにご自身を啓示されたことと、啓示された主を私たちが礼拝し、主と共に生きることを、その中心的テーマとして語っている。聖書は、地上のパラダイスでの礼拝で始まり、天上のパラダイスでの礼拝で終わっている。聖書は礼拝の書である。私たちは、聖書における礼拝の中心的なモティー

フの一つである、想起と待望という観点から、ささやかな聖書の礼拝学的研究をしてみたい。この際、旧約聖書の礼拝については概観にとどめ、主に、新約聖書の礼拝について、相対的に詳細な学びをすることが、今日の教会における礼拝のあり方についての示唆を得るために、有意義であるということには、どなたもが同意してくださることだろう[1]。

二　旧約聖書の礼拝

旧約聖書は、天地創造の神への讃歌で始まり、神の民による礼拝の形骸化に対する、神の預言者の批判と、神への真の礼拝の完成の約束で終わっている。

創世記は、神による世界と人類の創造、創造主への礼拝の日（安息日）の制定、その日の主による祝福で始まっている。神である主を礼拝し、主と共に歩んでいた、人類の先祖は、やがて、神を神とすることを拒否し、自分自身を神とする道を選び取ってしまった。二世代目の兄は、自分の行ないによって、神から義を獲得しようとする礼拝を、弟は、神からの贖いの恵みによる義に、感謝する礼拝を献げた。主は弟の礼拝を受け入れられた。その後の世代の人類は、「神」を利用する宗教の礼拝の流れと、「主」と共に生きる信仰の礼拝の流れの、いずれか一方の中を歩むことになる。

やがて、人類はまったく堕落し、主は、大洪水によって、彼らを滅ぼされた。「主」を礼拝し、主に従っていた、ノアの家族だけが、「水（洗礼）を通って救われ」（Ⅰペテロ三・二〇～二一参照）、新しい世界の、新しい人類の先祖となった。ノアが献げた全焼のいけにえを受け入れられた主は、人が、生来の罪人であることを承知の上で、虹の契約を立てられ、彼らを祝福された。ところがその後、数も知識も増えた人類は、主の恐るべき裁きと、偉大な救いの御業を忘れ、再び、「人間崇拝」のシンボルである、バベルの塔を建てた。主は、人の言葉を混乱させ、彼らが恐れていたように、地の全面に散らされた。主を礼拝し、主と共に歩む人々は再びマイノリティとなった。

族長時代は、自己啓示される主への礼拝、主との愛の交わりとしての礼拝、主の祝福の約束へ、信仰と献身によって応える礼拝等、聖書における礼拝の「原型」を教えている。アブラハムは、主の祭壇を築き続ける、礼拝者として歩み、自分の愛する独り子を献げ、礼拝者として完成された。他の族長達の歩みも、主を礼拝する者としての歩みであった。

モーセの時代、イスラエルは、礼拝の民として、エジプトから救い出された。彼らは、主を礼拝するためにエジプトを出た（出エジプト三・一八他）、「祭司の王国」（一九・六）である。旧約時代の礼拝は、モーセ時代に、主――ヤハウェが明確な自己啓示をされ、聖なる主と、主に聖別された民との交わりの場所（会見の幕屋、後は神殿）が設定され、礼拝の時、内容、意味、および、奉仕者等が、主のみことば（律法）によって定められることにより、確立されたと言えよう。

礼拝共同体であった旧約の神の民に与えられた、律法の中心である十戒は、礼拝すべき救いの神――主の愛を大前提として、その愛に応答する神の民を、神と隣人を愛する幸いな歩みへと導こうとされる、主のみことばであった。唯一の神である主を信じ、正しく礼拝し、主を愛して従い、主の御名の栄光のために生き、安息日に、主の民として、主を礼拝する幸い、また、共に主を畏れ敬い、互いに愛し合う家族の幸いが、第一から第五の戒めで、勧められている。続く第六から第十の戒めは、主を愛して、前半のみことばに生きる主の民の、隣人愛に基づいた共同体生活の幸

いへの、主の勧めである。このように、十戒には、礼拝と生活の密接な関係が見られる。

族長以前、族長時代、モーセ以後の、どの時代の礼拝を観察しても、旧約の礼拝には、主の救いの御業の想起による現在化と、主への感謝の応答、主が約束された祝福の成就への待望による忍耐の中で、主と共に歩むという構造がある。蛇の頭を踏み砕く女の子孫が来るという約束を、主から与えられた、アダムとエバは、彼らの裸を覆うために、主が着せてくださった皮の衣をまとい、主の豊かなあわれみを感謝しつつ、救い主を待ち望みながら、主の御名によって祈りつつ歩み始めたのである。アブラハム達族長は、主の選びと恵みを感謝しつつ、主の約束の成就への待望と、天の故郷へあこがれの中を、恵み深い主と共に歩み続けたのである。モーセ以後、主の宝の民とされたイスラエルは、エジプトからの救いという主の偉大な御業を想起し（出エジプト一二・一四）、祭儀、特に過越の祭を祝い、安息日礼拝を行なうことによって、その豊かな恵みを現在化し、主への感謝の応答として、主のみことば（律法）に聴き従い、大いなる御業を行なわれ、大いなる約束を実現される、主を信じて、主と共に歩み続けるはずだった。

しかし、その後のイスラエルの歴史は、偶像礼拝への堕落と礼拝改革の繰り返しの歴史であった。彼らは、主を礼拝することによって[2]、歴史における主の救いの御業を想起することよりも、現実生活の豊かさと幸福を追求するようになり、主の祝福の約束を信じなくなって、自然神礼拝、御利益宗教へと堕落して行った。やがて、世界の救い主の来臨や永遠の神の国への待望も失い、主のみことばに従わなくなったイスラエルは、ついに、彼らの救いの神である主ご自身を捨ててしまった。預言者や士師や主を畏れる王達が、主によって立てられ、何度も宗教改革を行なったが、結局、イスラエルは悔い改めることもなく、主の裁きを受けることとなった。その後、七十年間の捕囚からの開放という、夢のような主の救いを経験した旧約の民は、神殿の祭儀礼拝と会堂のみことば礼拝によって、主の救いを想起して現在化し、再び、主と共に歩み始めた。しかし、やがて、神殿礼拝は形式化して、祈りの家が強盗の巣となり、会堂礼拝では律法主義者がモーセの座を占めるようになり、恵み深い主は忘れ去られた。

旧約時代における礼拝の歴史は、人は、自分の力や外からの働きかけだけでは、自分の罪深さを克服して、真の礼拝者として歩み続けることはできず、神の力によって内側から造り変えられていくことが、絶対に必要であることを明らかにしている。こうして、旧約礼拝史の結論は、人は、預言者が約束した救い主の来臨と、「新しい契約」の成就を待望しなければならないということであった。人は、救い主による、完全な贖罪による救いを与えられ、聖霊による新生によって、新しい心を与えられなければ、神の国を見ることができず、神を正しく礼拝しつつ、神である主と共に歩み続けることはできないのである。

三　新約聖書の礼拝

a　新約聖書は礼拝の書

新約聖書は、幼子であるキリストに対する東方の博士たちの礼拝によって始まり、小羊であるキリストに対する天上の教会の礼拝で終わっている。

マタイの福音書は、冒頭で、主がインマヌエルの神であると宣言し、礼拝者の模範ともいうべき博士たちを紹介している。末尾では、天と地においてすべての権威を与えられた復活の主を礼拝する弟子達を紹介し、主が、礼拝者とされた彼らに、大宣教命令を与え、世の終わりまで、ご自分がインマヌエルの神であると宣言しておられる。教会の福音書と呼ばれるマタイには、教会の礼拝に関する用語や事柄が多く伝えられており（例・礼拝、主の祈り、主の御

名によって集まる所、三位一体の神の御名による洗礼等)、その記事の多くは、礼拝で語られ、教えられていたものであることは、疑う余地がない。

マルコの福音書は、イエス・キリストの福音宣教を主要な目的としているために、教会と礼拝に関する記事は多くないが、当時の教会の礼拝で使徒達が伝えていた福音(ヨハネのバプテスマから主の昇天までの証言=使徒一・二一～二二)と、キリスト者が信じて、礼拝する主が、どんなお方であるかをはっきり伝えている。マルコは、新約時代の教会の礼拝に関する貴重な資料の原点である。

ルカの福音書は、礼拝の場所で起こった大きな喜びの出来事で書き起こされて、非常な喜びに満ちあふれて礼拝する使徒達の姿で結ばれている。ルカは、教会が礼拝する主は、すばらしい救いの喜びを与えるお方であり、主に救われた人は、大きな喜びに満たされ、讃美し、感謝し、主を礼拝し、主と食事し、主と共に歩むようになることを伝えている。喜びの福音書であるルカのユニークさは、高く評価されなければならない。ルカはまた、新約時代の教会の礼拝に集う人々が、罪人や取税人、障碍者や貧しい人々、女性や子ども達等、当時の社会で疎外され、差別されていた人々であることを暗示している。

ヨハネは礼拝の福音書である。以下に、O・クルマンが、初代教会の礼拝に関する研究の中で詳述している事を簡潔に紹介し、さらに追加してこれを説明する[3]。教会が礼拝する主は受肉したロゴスである。説教の中心は、ヨハネのように、キリスト証言である。主の洗礼は、聖霊による洗礼、神の小羊の死に与る洗礼である。カナの奇跡は、主の死に与る水(洗礼)とワイン(聖餐)のしるしである。神殿聖別は、主と復活の主の体である教会が神殿=礼拝場所であることを意味する。ニコデモへのみことばは、聖霊による新生と洗礼が神の国に入る条件であることを教えている。サマリヤの女と主の出会いの物語の中心主題は礼拝であり、「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまこ

とによって礼拝しなければなりません。」との主のみことばは、礼拝に関する最重要聖句の一つである。ベテスダの池でのいやしは、洗礼と罪の赦しの恵みを語っている。パンの奇跡は、最後の晩餐の記事がないこの福音書では、聖餐の意味を持ち、主の肉を食べ主の血を飲むというみことばは、この福音書にしかない。シロアムの池でのいやしは、ペテスダの場合同様、古代教父達によっても、洗礼と関係付けて理解されている。洗足は、洗礼の一回性と聖餐の反復性、主と主の体である教会の交わりを意味している。決別説教には、父の家=未来の先取り、キリスト想起、聖餐の祈り(例・ディダケーでは、ぶどうの木が聖餐の祈りに含まれる)[4]、大祭司の祈り等、礼拝要素に満ちている。クルマンはキリストの死から水(洗礼)と血(聖餐)の恵みが流れ出るという、一九・三四を、ヨハネの頂点とする。復活の主による、八日目毎の弟子達への顕現は、主の日が礼拝の日であること、礼拝への主の現臨と教会の世への派遣等を意味している。トマスの礼拝こそ、ヨハネが目標とする礼拝である。ベテスダ湖畔の出来事は、礼拝の中心が、復活の主と弟子達との会食と愛の交わりであることを意味している。ヨハネは、一世紀末の教会の礼拝を背景としている。

使徒の働きは、初代教会の礼拝について、豊富な情報を提供している。キリストの教会は、礼拝の日である主の日に、降臨された聖霊によって、エルサレムで誕生した。礼拝には、世界各地から集まって来た、ユダヤ人だけでなく、異邦人も出席した。主を信じて、洗礼を受けた人々が弟子=教会員となった。礼拝では、使徒達の教えと交わり、パン裂きと祈り、献げ物と讃美等が行なわれていた。最初、弟子達は、神殿と会堂の礼拝にも参加したが、次第に家の教会の礼拝だけに出席するようになった。礼拝は、当初三時の祈りの時にも行なわれたが、主日の朝や夜に行なわれるのが通常となった。礼拝は、宣教師達を派遣する時であり、彼らの宣教報告を聞く時でもあった。教会では、福音の宣教と聖書による教育がされただけでなく、パウロがツラノの講堂でしたような、伝道集会とも呼べる集いを持つ

こともあった。使徒達が、各地の信者の群れを訪問する時、しばしば七日間――礼拝の日を含む期間――滞在して、彼らと共にパンを裂いた。使徒の働きは、囚人だった使徒パウロの借りた家で、礼拝が行なわれ続けた報告で終わっている。

使徒達の書簡には、彼らの教会の礼拝が背景にある[5]。ローマ人への手紙は、パウロが、全世界で宣教していた福音と、世界中の教会で教えていた、福音にふさわしい信者の歩みと教会のあり方についての勧めを、ローマの多くの家の教会の礼拝で朗読されることを前提にして、まだ見ぬ地に書き送った手紙である。使徒は、人間が、真の神を礼拝せずに偶像礼拝をしていることを不義の根とし、献身と奉仕の生活を内容とする礼拝を、神のあわれみによって救われたキリスト者が、義に生きるための土台としている。また、使徒は、自分の奉仕が、人を神への供え物とする、祭司の務めであり、神への礼拝であるとも言っている。この手紙だけでなく、他の使徒の手紙も、挨拶、祈り、本論＝説教、頌栄、（派遣）、祝祷という、当時の教会の礼拝式順と考えらえる順序に従って書かれており、使徒達の書簡を読むことが、主日礼拝の、主要な内容となっていたことが想像できる[6]。

コリント人への手紙以後の書簡にも、初代教会の礼拝の様子を知るための、多くの記事や言葉が散在している。例えば、コリント教会には、洗礼を授けた働き人と洗礼を受けた信者との癒着の問題、純粋で真実なパンで祭りとしての礼拝が祝えなかった問題、信者と教会が神殿であることが理解されていなかった問題、女性がかぶり物なし礼拝に出席した問題、聖霊の導きに従った礼拝の混乱の問題、愛餐と聖餐がいっしょに正しく行なわれていなかった問題等、礼拝に関する多くの問題があった。使徒が、長い間大いに悩みつつ、厳しく指導したので、問題は徐々に解決し、健全な礼拝が回復され、コリントの信者も、パレスチナの貧しい教会への支援募金を、毎主日の礼拝で、熱心に献げるようになった。その他の教会にも、ガラテヤ人への手紙に記された、アンテオケ教会での、ユダヤ主義者の影響による、愛餐と聖餐の分裂事件等、多種多様な問題があったことが、想像できる。

獄中で執筆された書簡の中には、パウロがピリピの獄中同様、ローマの獄中でも喜んで主を讃美していたことを想像させるように、当時の礼拝で主に献げられていた讃美歌が、いくつもあり、讃美についての教えも多い。さらに、諸教会のために、熱心にとりなしていたに違いない、使徒の驚くべき祈りも、数多く記され、祈りについての勧めも多い。

牧会書簡で、パウロが、若い牧師達に、牧会に関してだけでなく、礼拝の指導や、礼拝奉仕に関する勧告もしているのは、礼拝の重要性を知っていた彼には当然のことだろう。

公同書簡の中でも、ヘブル人への手紙は、旧約の礼拝に対する新約の礼拝の優位を弁証する重要な文書である。御子における神の啓示の完結、イエスがモーセにまさる神の家のしもべであり、アロンにまさる大祭司であるとの主張、不完全なために反復される必要があった旧約の祭儀が、キリストの完全で永遠の犠牲によって終わったという主張等、新約聖書の教会の礼拝観を知る上で、たいへん重要な教えに満ちている。他の公同書簡にも、各々の書簡の背景となっている諸教会の礼拝の様子が、眼前に浮かぶような記事が多い。ヤコブが牧会していた教会には、金持ちと貧しい人を差別していた礼拝があり、ペテロが指導していた教会の礼拝では、聖書の誤った解釈に基づく説教やにせ教師の説教がされていたらしい。ヨハネが奉仕していた教会の礼拝では、旅先で訪問した教会のキリスト者の真実な愛に触れ、それを感動しながらあかしている兄弟達がおり、ユダは、自分中心な欲望のままにふるまって、愛餐の交わり破壊していた人々を、激しく非難している。

黙示録が象徴的に描いている天の礼拝が、一世紀末の教会の礼拝を反映していることは疑う余地がない[7]。黙示録からは、礼拝の日を、主の日と呼ぶことが、すでに定着していた時代に、老いたヨハネが監督していた、小アジアの

諸教会の礼拝で、どのような説教がなされ、どんな讃美や祈りが献げられていたかを、よく知ることができる。

新約聖書は、ハレルヤ、ホサナ、アーメン等のように、ユダヤ教の礼拝から受け継いだ讃美や祈りの用語や、アバ（父よ！）のように、主ご自身の祈りに習った呼びかけ等とは別に、キリエ・エレイソン（主よ、あわれんでください！）のような、教会が新しく使うようになっていた、礼拝用語の一つである、マラナ・タ（主よ、来てください！）という叫びの祈りで終わっている。主は、多くの試練と激しい迫害の中で戦っていた、ご自身の民に、「しかり、わたしはすぐに来る。」と約束され、栄光の主を礼拝し続ける教会は、再臨の主を待望しつつ、すべての主を礼拝する者達へ、主の恵みを祈っている。

以上のように、初代教会の中心が礼拝であったことは、疑う余地のないことであって、新約聖書の緒文書が、礼拝の中から生まれて、礼拝で用いられていたことは明白である。また、信仰と教会のあり方が、礼拝のあり方と、密接な関係にあることも明らかである。健全な信仰と教会は、健全な礼拝を形成し、健全な礼拝が、健全な信仰と教会を育成するのであり、その逆もまた同様なのである。初代教会の礼拝が、新約聖書を生み出し、新約聖書が、主を礼拝する教会を育てたと言うことができる。

b　新約時代の教会の礼拝

① 新約時代の教会における礼拝の意味

新約聖書において礼拝を意味する主要な言葉は、三つである。第一は、レイトゥルギア（λειτουγία）とレイトゥルゲオー（λειτουγίω）で、キリスト教の礼拝を意味する、リタージー（liturgy）の語源である。元来は、民と業という二つの言葉の合成語で、兵役、納税、祭儀奉仕等、市民の公務を意味していた。新約聖書では、キリストの大祭司としての務め（ヘブル八・六）、教会の礼拝（使徒一三・二）、教会間の相互援助の奉仕（ローマ一五・二七、Ⅱコリント九・一二）等を意味している。

第二は、プロスクネオー（προσκυνέω）で、誰かに敬意を表わし、ひれ伏して礼拝する行為を意味している。東方の博士達はこの礼拝の模範である（マタイ二・二）。主はサタンに、「あなたの神である主を拝み（＝π）、主にだけ仕えよ（＝λ下記）。」と命じられた（マタイ四・一〇）。この言葉は、主とサマリヤの女との対話の中で、十回用いられている（ヨハネ四・二〇～二五）。神殿礼拝も、神をひれ伏して拝むことである（使徒八・二七、二四・一一）。黙示録では、神と小羊とを礼拝する（四・一〇等）意味でも、獣（皇帝――サタン）を礼拝する（一三・四等）意味でも用いられている。

第三は、ラトゥレイア（λατρεία）とラトゥリュオー（λατρεύω）という言葉で、元来は報酬のための仕事を意味していたが、神への礼拝と奉仕を意味するようになった。新約聖書では、名詞形と動詞形で合計二一回用いられている。主に、神に仕える意味（ルカ一・七四、ヨハネ一六・二、ヘブル九・一、黙示録二二・三）や、礼拝の意味（ローマ九・四、ピリピ三・三）等で用いられるが、ローマ一・九では、福音を宣教する奉仕が、ローマ一二・一では、献身したキリスト者の教会奉仕と日常生活が、この言葉で表現されている（ヤコブ一・二六～二七も参照）[8]。

このように、新約聖書の教会において、礼拝とは、いわゆる礼拝式で神を礼拝することだけではなく、教会の奉仕や交わり、日常の生活において、神と隣人を愛して生きることまでを含んでいるのである[9]。新約時代のキリスト者にとって、礼拝は、週一日だけの神への奉仕ではなく、毎日の生活だったのである。今の教会の「礼拝（式）」と同じ意味の言葉を、新約の中に発見することは不可能に近い等と言う学者もいるほどである[10]。

そういうわけで、私たちが、新約聖書における礼拝について考える場合、礼拝式と教会・日常生活を区別するよう

な考え方がないことを、何よりもまず第一に確認しておく必要がある。私たちは、新約時代のキリスト者達が、どのように主を礼拝したかだけではなく、彼らが、どのように生きたかということまでを、いっしょに検討しなければならない。

しかし、私たちは、新約の教会の歩み全体から、目を離さないようにしながらも、新約聖書各書の学びから明らかになって来た、新約時代の教会の礼拝（式）に関する情報と、使徒後教父時代の礼拝（式）に関する資料から推測して、新約時代の礼拝式の主な要素を再構成し、新約の礼拝（式）について考えてみることにしたいと思う。

② 想起と待望

結論から先に言えば、新約時代の礼拝にも、旧約時代の礼拝と同様、主の救いの御業の想起による現在化と、主への感謝の応答、主が約束された祝福の成就への待望による忍耐の中で、主と共に歩むという構造がある。しかし、キリスト以前の礼拝とキリスト以後の礼拝には、一つの決定的な違いがある。それは、新約の教会が与えられたものとして想起した主の救いが、旧約の神の民が、待望していたものであったということである。

キリスト来臨および聖霊降臨以前と以後の礼拝には、さらに、もう一つの決定的な違いがある。旧約時代の礼拝では、想起によって過去を現在化し、待望によって未来を現在化していたのだが、新約時代の礼拝では、過去が同時に現在であり、未来もまた同時に現在であることを確認するということである。

新約の礼拝に想起と待望の構造があることは、多くの礼拝学者達が指摘している[11]。この場合、想起は単なる過去の記念や思い出ではなく、過去の主の救いの現在化であり、待望は単なる未来への希望や願いではなく、未来に完成する主の救いの現在化（または、先取り）であるという意味である。しかし、新約の教会は、礼拝で過去を想起して

現在化していただけなのだろうか？　確かに、旧約の礼拝では、過去（例えば過越の救い）は、ある歴史の一時点における出来事であり、現在はその結果であるにすぎないため、過去を再経験（例えば過越の祭を祝う）することによって、現在化する必要があった。しかし、新約の礼拝では、過去の救いは、歴史上の出来事であると同時に、聖霊の働きによって、現在まで継続し続けているし[12]、なによりも、礼拝すべきお方であるキリストは、過去から現在、いや、世の終わりまで、昨日も今日も、いつまでも同じお方として、いつも、教会と共におられるお方なのである。そういうわけで、新約の教会は、礼拝で、過去が同時に現在である事実を想起＝確認し、感謝し[13]、歓喜していたのである[14]。

さらにまた、新約の教会は、礼拝で未来を待望して現在化（先取り）していただけなのだろうか？　確かに、旧約の礼拝では、未来は（例えばメシアの到来）は、まだ実現していない出来事であって、現在はただ待望することしかできないため、未来の約束（例えばメシア預言）を聴くことによって、現在化する必要があった。しかし、新約の礼拝では、未来における救いの完成は、現在すでに始まって継続していることの完成であって[15]、聖霊によって、証印を押されて、保証されていることなのであり、何よりも、礼拝すべきお方＝キリストは、未来に再来されるだけでなく、現在すでにおられるお方なのである。そういうわけで、新約の教会は、礼拝で、未来はすでに現在である事実を待望＝確認し、感謝し、歓喜していたのである。新約のキリスト者達は、過去から、すでに闇の中に輝いている天からの光と、未来から、すでにこの世の中に差し込んで来ている、驚くべき光の中を、その永遠の光の源に向かって、いのちの光である主と共に歩んでいたのである。

このように、今や、過去と現在と未来に断絶はないのである。この神の大いなる救いとキリストの永遠の臨在と聖霊の確かな導きの連続性は、父なる神の愛、イエス・キリストの恵み、聖霊の交わり（Ⅱコリント一三・一三）によ

る絶対的な永遠の連続性であって、神を礼拝して奉仕する教会の罪によって断絶するものではない。むしろ、罪の増し加わるところには、恵みが満ちあふれるのである。この永遠の三位一体の祝福を使徒が祈った、コリント教会の不信仰と罪深さを見よ！　たとえ、教会が、あの世紀末のラオデキヤ教会のようになったとしても、神の救いと主の臨在と聖霊の導きが取り去られることはない。憐れみ深い三位一体の神は、教会を、愛の鞭で懲らしめ続け、心の戸を叩き続け、悲しみつつもとりなし続けられるからである。また、教会を、キリストにある神の愛から、引き離すものは、天にも地にも、今も後も、何一つないのである。

神が与えてくださる救いの中心である、再創造の恵み＝キリストに似た者へと造り変えられるということには、絶対的な永遠の連続性があり、新生、聖化、栄化という、救いの三局面から見ても、当然同じ連続性がある。

新約時代の教会における礼拝の要素を、注意深く見ていくと、新約の教会が、絶対的な永遠の連続性があるものを礼拝の中心にすることに、励み続けていたことがよくわかる。同時に、もし、教会が、相対的で一時的なものを、礼拝の中心におくなら、旧約の時代と同様、礼拝は混乱し、衰退し、堕落への道を辿る危険があるということもわかる。

以上のようなわけで、絶対的な永遠の連続性がある過去の想起は、現在の感謝と歓喜を生み出すだけでなく、さらに、未来への大きな待望による忍耐さえも生み出すのである。こうして、新約時代の教会は、すでに与えられた偉大な神の救いの恵みを想起し、やがて受け継ぐために天にたくわえられている永遠の祝福を待望し、さまざまな試練の中でも、信仰と希望と愛に燃えて歩み続けていたのである。初代教会時代の多くのキリスト者は、「イエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっていたのである。（Ⅰペテロ一・二〜二五参照）。」

③　新約時代の教会における礼拝の要素

以上のような、新約時代の教会における礼拝の中心的な構造を心に留めつつ、その礼拝の要素を検討してみることにしよう[16]。

新約時代の教会の礼拝の目的は、キリストによってご自身を啓示された、天の父なる神の栄光が現わされ、その御名があがめられるようになることであった。父なる神の子どもとされたキリスト者達は、御子によってすでに現わされていた、御父の栄光を、想起し、「アバ、父よ。」と、御名を呼びつつ、天の父なる神をほめたたえる礼拝を、献げていたのである。彼らは、自分達の礼拝の中に、神が確かにおられることを信じており、礼拝に集う求道者達もそれを知って、ひれ伏して神を拝むようになることを願っていたのである（Ⅰコリント一四・二三〜二五）。さらに、彼らは、父なる神を永遠にほめたたえられるようになる日を待望しつつ（黙示録一九・一〜五等）、「御名があがめられますように」（主の祈りの第一祈願）と礼拝で祈り続け、そのために、主と共に生きていたのである。教会は、永遠の神だけを讃美し、その栄光を現わす礼拝を献げていたのである[17]。そのため、ペテロは、コルネリオが自分を拝むのをいましめ、バルナバとパウロは、自分達に犠牲をささげようとした、ルステラの人々を諭したのである。当然、教会は、天使を礼拝することを禁じ、自分の徳を高める異言を礼拝で話すことを、積極的には勧めなかった。

新約の教会は、キリスト者達等を礼拝に招く時にも、主によってすでに与えられている救いを想起させ、近づいているその救いの完成の日を待望させている（ヘブル一〇・一九〜二五）。教会は常に、現実生活の豊かさと幸福等というような、相対的で一時的な祝福だけを受けるためにでなく、永遠のいのちの水を受けるために（ヨハネ四・一四、黙示録二二・一七）、礼拝に集うよう人々を招いていた。新約の教会は、礼拝の真の招集者が、この永遠のいのちの水を与えてくださる、イエス・キリストご自身であり[18]、二人でも三人でも、主の御名において集まる所には、主が

その中におられると確信していた[19]。

主は、礼拝の招集者であると同時に、礼拝の対象となられたお方でもあった。教会は、みことばと聖礼典によって、来臨されて十字架で死なれ、復活して高挙された、主を想起し、そのお方が、今礼拝の中に現臨しておられることを信じていた[20]。さらに、主が、夕暮れのエマオでのように、聖書を説き明かし[21]、朝明けのテベリア湖畔でのように、食事を共にしてくださると信じていた[22]。主の日の礼拝は、トマスのように「私の主。私の神。」と告白し、イエスの前にひれ伏す者達の集まりであって、教会は、イエスを、「王の王。主の主。」と崇めて仕える主の民であった。新約時代の教会は、キリストとの愛の交わりをするために集まり、主と主を信じる者を憎む世で、いつも共にいてくださる主と共に歩み続けるために、派遣されていったのである。そういうキリスト者にとって、殉教の場でさえ、ステパノのように、神の右に立っておられる主への礼拝の場であった。初代教会が、再び来られる主を待望していたことは言うまでもないことだが、主はいつも共におられたので、彼らは、再臨主を待望する祈りを頻繁に繰り返しはしなかった[23]。

しかし、激しい戦いと迫害の中にあった彼らの礼拝では、絶望からでなく、希望の中で、「マラナ・タ」（主よ、来てください！）の叫び声があげられていたのである。主の再臨待望は、時には、テサロニケのような熱狂主義に陥る危険があったが[24]、新約の教会の始まりから終わりの時まで、礼拝を貫く希望であった。新約の主の民は、永遠の救い主、キリストを祝うために集まったのであり、礼拝を祝うために集まっていたのではない[25]。そのために、彼らは、聖霊、主日、讃美、祈り、告白、宣教、聖餐等々、キリストを祝う礼拝の内容そのものの充実には、最大限の努力をしていたが、礼拝式の要素を、論理的に組み立てたり、その内容を、典礼的に整備すること等には、それほど大きな関心を持ってはいなかった。私たちは、ユダヤ教の神殿礼拝、会堂礼拝、家庭礼拝等で行なわれていたこと、そして、

何よりも、主ご自身が始められたことを、新約の教会の礼拝に見ることはできる。礼拝形式については、使徒二・四二における礼拝で、使徒たちの教えと交わりが第一部を、パン裂きと祈りが第二部を構成していたかどうかは不明確ではあるが[26]、二世紀以後の古代教会における、みことばの礼拝とパンとワインの礼拝の二部式礼拝の原型が、新約の教会の中にあったことは推定できる。新約時代の礼拝を、みことば礼拝、聖餐礼拝、洗礼礼拝等に分類できるかどうかも明確ではない[27]。いずれにしても、一世紀の資料では、全教会的に統一された公同礼拝式文等は、どこにも見い出すことはできない。新約の礼拝は、一時的な集まりの順序等にでなく、永遠のお方に集中していたのである。

新約の礼拝は、「霊とまことによる礼拝」であり、パウロは、自分達を、聖霊によって礼拝する者であると明言している。聖霊は、罪と義と裁きについて世の人々の目を開き、人々を、「イエスは主です。」と告白できる新しい人に生まれ変らせ、一つのキリストのからだに結びつけるお方である。礼拝する者は、聖霊に満たされて、讃美を献げることができ、どう祈ったらよいかわからない時も、聖霊のとりなしを信頼できる。聖霊はまた、主ご自身と主のみことばを、想起させてくださり、主をあかしして、主の栄光を現わしてくださるお方である。さらにまた、聖霊は、御父と御子と私たちとの愛の交わりを喜びに満ちたものにし、私たちをこの世に派遣して、教会の主から委託された使命を果たさせてくださるお方である。聖霊こそ、絶対的な永遠の連続性がある、過去を想起させて、現在の感謝と歓喜を生み出し、さらに、未来への待望による忍耐を生み出すお方なのである。

コリント教会では、聖霊の賜物が大いに用いられる礼拝が献げられていたが、それが、礼拝や教会の中に混乱をもたらしていた。パウロは、聖霊の賜物が、預言も異言も知識もすたれていく、相対的で一時的なものであることを指摘し、絶対的な永遠の連続性があるもの、信仰と希望と愛、特に聖霊の実である愛を、追い求めるように勧めている。相対的で一時的なものは、聖霊の賜物やその働きとしての奇跡等であっても、永遠の主と永遠のいのちのみことばの

真実の証明、人の永遠の救い、永遠の神の国の完成、主の永遠の栄光等々、絶対的で永遠のものに奉仕するしもべにすぎないのである。

新約の礼拝者は、主によって与えられている、絶対的で永遠の救いを想起して感謝し、また歓喜し、その救いの完成の日を待望して、忍耐をもって歩む人々であった。しかし、主の弟子とされた彼らにとって、絶対的で永遠の連続性のあるものの中心とは、彼らの主イエス・キリストに似た者とされていくことであった。そういうわけで、主日の礼拝は、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに変えられて行く場であった。洗礼は、キリストと一つにされることであり、主のみことばの宣教は、キリスト物語であって、自分たちが同じ姿となりたいと願って、一心に走っている目標を知ることであり、主の晩餐は、そのキリストと一つとされる聖なる会食であった。また、主に似た者とされていくことを目標とする、キリスト者の礼拝は、主が受けられた試練や苦難を受けて、主に似た者とされることを感謝する主の弟子達、主のために患難や迫害を受けて、主に近づくことを喜ぶ主の奴隷達、主が経験された罪と世と死との戦いの中で、主と同じ勝利の凱旋の列に加えられることを信じた主の兵士達の礼拝であった。彼らは、毎週、主がユダに裏切られた水曜日と、主が十字架で死なれた金曜日に、断食をして祈るようになり、主が死者の中から復活された日に、栄光の主を讃美して祈り、主のみことばを聴き、主の食卓に与かり、聖なる口づけをもって、互いにあいさつをかわし、主の祝福と共に、試練と苦難、患難と迫害、そして戦いのある世へと遣わされていったのである。それに対し、絶対的で永遠のものを求めないで、現実生活の豊かさと幸福等の、相対的で一時的な祝福を第一に求め、世を愛する人々は、礼拝の交わりから出ていったのである。

礼拝の司式は、家を礼拝の場として献げた信徒＝家長がしていたとする説もあるが[28]、使徒、預言者、牧師また教師、また、監督等が、専門的に担当するようになっていったと考えられる[29]。しかし、どんな司式者にも、また、他

の礼拝奉仕者にも、前述した新約時代の教会の礼拝者達の模範であることが求められていた。

さて、主の復活を記念する、主の日の礼拝は、その礼拝時間が早朝であれ、夜であれ、五十年代には定着していたと考えられており（使徒二〇・七）[30]、ヨハネがパトモスに流された頃には、主の日という呼称も、定着していたと考えられる（黙示録一・一〇）。主の日の礼拝は、当時の世界で主と呼ばれていた、皇帝への礼拝に対抗する意味もあっただろう。また、週の初めの日を、「八日目」と呼ぶようになった教会は、最初の天地創造の六日間と、安息日の七日目に続く、新しい創造が始まった日、闇の中に永遠の光が輝き始めた日として、礼拝の日を理解していたと考えられる[31]。主の日の礼拝は、十字架と復活の主によってもたらされた、いのちと安息とを想起して、約束された永遠のいのちと永遠の安息を待望する場であった。こうして、新約の教会は、相対的で一時的な、毎日の神殿礼拝や安息日毎の会堂での礼拝から、次第に遠ざかり、絶対的で永遠の意味を持つ、主の日の礼拝を、どんな激しい迫害の中でも、死守していくようになったのである。

初代教会の礼拝における、讃美と祈りと信仰告白もまた、到来した神の国、来臨されたキリスト、キリストによって与えられた救い等、絶対的で永遠のものを想起して、歌い、祈り、告白し、それらの完成を待望する、聖霊による働きであり、その中心は、圧倒的にキリストであった（讃美の例は、エペソ五・一四、一九、ピリピ二・五～一一、Ⅰテモテ三・一六等、祈りの例は、マラナ・タの祈りと主の祈り＝割愛と、使徒達の祝祷・エペソ三・一四～二一、ヘブル一三・二〇～二一、Ⅰペテロ五・一〇～一一等、告白の例は、ローマ一〇・一〇、ピリピ二・一一等）。初代教会では、どんな讃美も祈りも信仰告白も、みことばに基づいており（コロサイ三・一六、ローマ一〇・八～一〇等）、天上における礼拝を、その目標としていた（黙示録四・八、一一、五・九～一四、一一・一五～一八、一二・一～一二、一五・三～四、一九・一～八等）。礼拝の讃美と信仰告白において、相対的で一時的なことを、その中心的内

容とすることはなく、祈りにおいても、現実生活の豊かさと幸福等の、相対的で一時的な祝福を求めることは、神の栄光や救いの完成等の絶対的で永遠のものを求めることに、常に従属している。

新約の礼拝の中心的要素は、みことばと見えるみことばである聖礼典であった。復活の主はみことばと聖礼典の中に現臨され[32]、主との出会いと交わりは、礼拝に集う全ての人に大きな喜びをもたらしていた。（ルカ二四・五二、使徒二・四六等）

家庭に聖書を持たなかった初代教会のキリスト者達にとって、聖書朗読と説教は、週に一度限り、みことばを聴くことができる、かけがえのないものであり、みことばだけが、人を救いに導き、養い育て、御国を継がせることができるものであったので、パウロは、牧師達に、聖書朗読と説教に専念するように勧めている。初期には、旧約聖書の朗読と、主の説き明かしに従った旧約聖書と神の国についての説教、また、主ご自身のみことばや物語[33]が中心であったが、次第に、使徒達の書簡の朗読も、各地の教会で行なわれるようになった。礼拝で語られるみことばは、最終的な神の啓示として、御子＝キリストにおいて語り終えられた、神の福音であり、絶対的で永遠の神のみことばでなければならず（ローマ一〇・一七、Ⅱコリント二・一七、五・二〇、Ⅰテサロニケ二・一三、Ⅱテモテ三・一四～一七等）、相対的で一時的な人間のことばであってはならなかった。

初代教会において、みことばと聖礼典は一つであり[34]、みことばなしに洗礼はなく、洗礼なしに陪餐はなく、聖餐なしに礼拝はなかった[35]。洗礼は主と一つとされることであり[36]、聖餐は一つとされ続けていくことである。洗礼はキリストの体に結ばれることであり、聖餐は結ばれ続けていくことである。洗礼は聖霊の授与を意味して[37]、聖餐は聖霊による交わりを意味した。洗礼も聖餐も、主によってもたらされた新創造の救いと、主によって建て上げ始められた教会を想起し、その完成を待望することであった。特に、聖餐制定のみことばの中には、想起と待望が明確に語

られている（Ⅰコリント一一・二三～二六、ルカ二二・一四～二〇等）。主を信じた人に洗礼を授けた教会は、永遠の救いをもたらさない割礼を拒否し、聖餐のために集った教会では、相対的で一時的な要素の強い会食（愛餐）は、聖礼典とはされなかった。愛餐は、新約時代の初期の頃は、聖餐と共に行なわれた持ち寄り会食であるが、次第に行なわれなくなっていったと考えられている。パウロとルカが記す聖餐制定のみことばには、パンとワインの間に食事があるが、マタイとマルコにはない。新約の教会は、霊的祝福だけでなく、物質的祝福も分かち合う交わりが[38]、神への奉仕であり、キリストに習う、恵みのわざであるとも信じていた。豊かな信者が財産を売った代金だけではなく、極度の貧しさの中にあった信者達の献金も、主日礼拝で献げられて、パレスチナの貧しい教会等のために用いられた。この特別な献金も、みことばに仕える教会の働き人の生活のため、聖餐のため（聖餐のパンとワインは信徒の献げ物の中から聖別された）、教会の貧しい信徒達のため等に用いられた、通常の礼拝の献げ物と同様、絶対的で永遠の、主の救いと教会のために用いられるべきものであった。

絶対的で永遠のものを第一とし、天の父の家から、主が教会を迎えに来られることを、熱心に待ち望んでいた、新約の教会には、家こそ礼拝場所にふさわしく、恒久的教会堂を建設する等という考えはなかった。古代教会時代になって、礼拝堂として用いられていた建物やカタコンベの壁には、良い牧者である主、復活、救い主を意味する魚等、絶対的で永遠なテーマを中心にした、絵やシンボルが描かれていたことが知られている[39]。

新約時代のキリスト者達は、主日の礼拝で、永遠の主と、主から与えられた、絶対的で永遠の連続性があるものを想起して、感謝して歓喜し、主に再び会う日と、主から受けたものの完成への待望の中で、信仰と希望と愛を新しくされて、主の祝福を受け、相対的で一時的な、この世の中における戦いの中へ、主と共に歩み、主のために生き、主

のために死ぬために、そして、永遠の栄光へと復活するために、派遣されていったのである。(40)

四　私たちの教会の礼拝

終わりに、新約聖書時代の教会の礼拝から学んだことを纏めて、私たちの教会の礼拝が聖書的な礼拝として成長していくためへの指針にしたいと思う。第一に、私たちは、想起すべきお方ともの、さらに、待望すべきお方ともののすべてを覚え、三位一体の神と、その神の愛の広さ、長さ、高さ、深さ、神のキリストにある全ての霊的祝福、神のご計画を、余すところなく（使徒二〇・二七）知って、神を心から讃美したいと願う。第二に、私たちは、絶対的で永遠であるお方とものを、礼拝の中心にし、神との愛の交わりをし、キリストを祝い、幸福よりも、主に似た者と変えられることや、信仰と希望と愛を、一心に追求していきたいと願う。第三に、私たちは、主によって、この世から、主の現臨の場へと召し集められ、主にある感謝と歓喜に満たされ、再びこの世へと派遣され、主と共に永遠の光の中を歩んでいく、主の教会でありたいと心から願う。マラナ・タ。アーメン。

注

(1) 小論に許されている字数に制限があるため、聖書箇所は必要最低限の表記とした。

(2) 岸本羊一「礼拝の神学」（日本基督教団出版局、一九九一年）二三頁　岸本は、出エジプト記一二・一四の「記念（想起）」を過越祭の制定詞として引用している。

(3) Oscar Cullmann, *Urchristentum und Gottesdienst* (zürich/stuttgart:Zwingli Verlag, 1962) pp.38～ 112

(4) ディダケー九・二

(5) Jürgen Roloff et al., *Handbuch der Liturgik* (Leipzig:Evangelische Verlaganstalt, Göttingen:Vanden-hoeck & Ruprecht, 1995) p.67　ロロフは、特にエペソとコロサイの強い礼典的用語について指摘している。

(6) Ibid. p.52

(7) Ibid. p.67

(8) 森野善右衛門「礼拝への招き」（新教出版社、一九九七年）五九～六二頁。新約において礼拝を意味する、三つの言葉について簡潔に纏められている。

(9) Christian Grethlein, *Abriss der Liturgik* (Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1989) p.21 ヴィリアム・ナーゲル「キリスト教礼拝史」（教文館 一九九八年）二一頁等。

(10) Karl-Heinrich Bieritz, *Im Blickpunkt:Gottesdienst* (Berlin:Evangelische Verlaganstalt, 1987) p.35

(11) 想起（特に聖餐における）については、岸本羊一「礼拝の神学」二二～二三頁、今橋朗「礼拝を豊かに」（日本基督教団出版局、一九九五年）二〇頁、九〇頁。想起と待望については、森野善右衛門「礼拝への招き」四九頁、六八～六九頁、森野は待望を、先触れや前祝いと呼ぶ、Cullmann, *Urchristentum und Gottesdienst* p.110. Bieritz, Im Blickpunkt:Gottesdienst, pp.44-45. クルマンとビエリッツは待望を先取りと呼ぶ。Roloff, *Handbuch der Liturgik* pp.58-59 ロロフは、聖餐の重要な祈りとなった、アナムネーシスとエピクレーシスを挙げる。ジェームズ・F・ホワイト「キリスト教の礼拝」（日本基督教団出版局、二〇〇〇年）七四頁。ホワイトは一世紀末に、終末待望の後退によって、教会にとって待望と同様に想起が重要になったと言うが、これには同意しかねる。

(12) Bieritz, *Im Blickpunkt:Gottesdienst* p.43.

(13) 聖餐はやがて「感謝」（エウカリスティア）と呼ばれるようになった。
(14) Roloff, *Handbuch der Liturgik* p.48、クルマンも喜びについて語る。
(15) Bieritz, *Im Blickpunkt:Gottesdienst* p.44.
(16) 礼拝要素の検討順（礼拝への招きの部分から）は今橋朗「礼拝を豊かに」五二～一一一頁を参考にした。
(17) Bieritz, *Im Blickpunkt:Gottesdienst* pp.49～ 50. 今橋朗「礼拝を豊かに」四一～四六頁。二人とも礼拝を神との対話として理解し、礼拝要素は下降するものと上昇するものに区別できることを指摘する。
(18) ナーゲル「キリスト教礼拝史」一九頁。
(19) Roloff, *Handbuch der Liturgik* p.46. 今橋と同じ指摘をする者は多い。
(20) Cullmann, *Urchristentum und Gottesdienst* p.37 同説者は多い。高橋保行「知られていなかったキリスト教」（教文館、一九九八年）六〇頁。西方教会で（当然プロテスタントも）、福音の中心が復活から十字架に移ったという、東方教会からの指摘は一考に値する。
(21) ウィリアム・ウィリモン「言葉と水とワインとパン」（新教出版社、一九九九年）三八頁。
(22) ナーゲル「キリスト教礼拝史」二二頁　聖餐を復活の主との会食と結びつける者は多い。
(23) Gerhard Ruhbach et al., *Gottesdienst feiern* (Giessen:Brunnen Verlag,1995) p.41.
(24) ナーゲル「キリスト教礼拝史」二四頁。
(25) Ruhbach, *Gottesdienst feiern* p.41, Stephan Nösser, *Wir feiern Gottesdienst* (Freien evangelischen Gemeinden Gudensberg, Obervorschütz und Werkel, 1996), p.3. 礼拝を祝祭と理解する者は多い。
(26) ナーゲル「キリスト教礼拝史」二三頁
(27) Roloff, *Handbuch der Liturgik* pp.48～ 67. ロロフは、初代教会の礼拝を三つに分類して詳述する。
(28) Ibid. p.56.

(29) ナーゲル「キリスト教礼拝史」三一頁。
(30) ヨゼフ・A・ユングマン「古代キリスト教典礼史」（平凡社、一九九七年）三二頁。
(31) 前掲書、三二頁。
(32) ホワイト「キリスト教の礼拝」三二九頁。
(33) Bieritz, *Im Blickpunkt:Gottesdienst* p.37. ビエリッツは会衆を主の物語劇の共演者とさえ考える。
(34) Ruhbach, *Gottesdienst feiern*, p.39.
(35) Grethlein, *Abriss der Liturgik*, p.23. グレトラインは「聖餐は初代教会の心である」と言う。
(36) Ibid. p.24 Roloff, *Handbuch der Liturgik* p.63 同説者は多い。
(37) Ibid. 同説者は多い。
(38) Bieritz, *Im Blickpunkt:Gottesdienst* p.37. 愛餐の理解は礼拝学者の間では多種多様ある。
(39) ユングマン「古代キリスト教典礼史」二六頁　三世紀に由来する教会堂の遺跡の壁画を紹介している。
ウォルター・W・エッティング「カタコンベの教会」（聖文舎、一九六八年）二七～二八頁。カタコンベの壁画を紹介している。
(40) Bieritz, *Im Blickpunkt:Gottesdienst*, p.46. ビエリッツのように、招集と派遣が礼拝の本質的な要素であることを指摘する者は多い。

（同盟福音・可児キリスト教会牧師）